

Column (コラム) ②

『 キャンプの夜に 』

三和中央病院副院長 松本 喜代隆

今年も、毎年恒例のキャンプに出かけました。患者さん4～5人と職員1～2名がひとつのバンガローに宿泊するスタイルです。私が担当している病棟では、2週に分けて、原則として全員参加で行っています。従来の感覚では到底キャンプ参加は無理と思われる患者さんも、全員対象です。将来的な退院を考える上で、病院以外のいわばグループホームのような枠組みの一夜をどのようにしのげるかを知る、お試しキャンプなのです。

今年は、毎日ほぼ不眠不休で動いている孤高のAさんの、夜の行動が心配されました。夜の森へずんずん分け入って行方不明にならないだろうか、徹夜で起きているのはいいとして、バンガローで過ごしてくれるだろうか、と心配の種は尽きません。

当日。病棟師長がマンツーマンで対応して距離感を測り、カレーライスをおかわりしている姿にホッと、バンガローのお風呂に入浴もして久しぶりにいい笑顔を浮かべたという報告に喜んだりしながら、夜が更けていきました。

やがて他の患者さんたちがそれぞれのバンガローに戻り、就寝の時間がとうに過ぎても、案の定Aさんだけはなかなかバンガローに入ろうとせず、キャンプの敷地内を歩きます。このままオールナイトかなと職員が覚悟を決めた頃、Aさんは意外な行動を取り始めました。

Aさんは、すでに消灯されている他のバンガローの灯りを次々に点けて回り始めたのです。職員が消しては、Aさんがまた点ける。押し問答の末、私たちは予備のバンガローでAさんと長い話を始めました。めったにない、いい機会です。時間はいくらでもあります。

「なぜ灯りを点けてまわるの?」「サドウしないようにさ」サドウという言葉がなかなか聞きとれず、私たちは何度も聞き返します。作動のことだとようやくわかります。「何が作動するの?」「悪が作動しないようにさ」「灯りを点けないとどうして悪が作動するの?」Aさんはズバリ答えます。「暗いと怖いからに決まっているだろう」「あんたたちも怖いだろう?この部屋の電気を消してみようか」「本当に消すぞ。いいな」Aさんの手で部屋の灯りが消されました。「ほら怖いだろう?」何かが鈍感になっている私たちは「いやあそんなに怖くない」と答えます。Aさんは、ばかな、という顔をし、暗闇が怖いものだという、そんな当たり前のことわからないのかとあきれます。「なぜ悪が作動しないようにしているの?」Aさんが「地球のため。苦しんでいる人のため」と答え、私たちはAさんの不眠不休の理由がようやくわかり始めます。誰も知らないところで人を救う。立派な仕事です。サリンジャーの書いた、ライ麦畑のキャッチャーのような仕事です。もし病気があるとして、彼が到達している高みは、かつて子ども時代の私の目標でもあったものです。いつ捨てたのだったか。キャンプの夜。消された灯り。一瞬の暗闇。味わえた者はたったの3人。みんな寝ているのだから電灯をつけないようにと止める3人。地球を守るスイッチ。

「あんなに優しい人はいません。いつまでも待っています」と後日、そう彼を評価する声を聞きました。よくわかります。あなたの言う、優しいという言葉の軽さも凄みも。

部署紹介 【西2病棟】

西2病棟はアルコール依存症をはじめ、ギャンブル依存症など嗜癖行動の治療を中心にこなっている専門病棟です。

治療プログラムは、本人の嗜癖行動に対するこだわりを変えていく認知行動療法や内観療法があります。また、断酒会やAAなどの自助グループとも協力しながら行動障害からの回復を目指しています。

病棟内では、医師、看護師、臨床心理士、精神保健福祉士が専任のスタッフとして患者さんの治療にあたっています。



Column (コラム) ①

『脳と心』

三和中央病院副院長 岩田 信之

Wさんの退院直前の病態をセロトニン症候群で説明したが、典型的ではありませんでした。この時、ふと思いました。認知症、老年期精神科は、まさに、『脳と心』の医療現場ではないかと。国立愛媛大学医学部の精神科の田邊教授（故人）は、認知症も専門分野でしたが、彼の教室は、精神科ではなく、『脳と心』の医学』と標榜されています。

統合失調症とか、境界型人格障害などの非器質性疾患は、主に症候学であり、薬剤は対症薬であり、ある程度の臨床経験を要する医学の中でも、特に経験が必要です。医師の標榜科は自由です。流石に、勝手に脳外科医・産科医とかを自称する者はいません。（万一、このような輩が出現した時に備えてあるのが、日本の専門医制度です。専門医とは、その分野のスペシャリストという意味ではなく、その分野の一般医である事を証明しているに過ぎません。念のため。）しかし、自称、精神科医・内科医は大勢います。『誰もが標榜できる精神科と内科だが、誰もがは標榜してはいけない精神科と内科。』と思います。

認知症は、器質性疾患です。アセチルコリンが減った状態→アリセプトでアセチルコリンを増やしましょう。ついでに、ドパミンが増加した幻覚妄想→抗精神病薬でドパミンを減らしましょう。セロトニンとノルアドレナリンが減少したうつ病→SSRIやSNRIで両者を補充しましょう。ドパミン減少と、そのためにアセチルコリンと不均衡になったパーキンソン症候群→ドパミン製剤と抗コリン剤を投与しましょう。

他の精神科疾患と比べて、患者家族にも、紹介医にも、否、スタッフにも、説明がしやすく、理解しやすい、何かと都合が良い疾患です。

これを、私は、脳の精神医学と考えます。しかし、実際の個々の人間は、部品から成り立つロボットではありません。（非器質性疾患の原因が不明な現在）こころの精神医学の領域の因子が認知症・老年期精神科の患者の病態に關与している可能性を想起する必要性を感じる今日この頃です。

10月28日・29日に第63回九州精神神経学会・第56回九州精神保健学会が佐世保で開催され、当院職員も参加させていただきました。

「認知症周辺症状の経時的変化評価スケール作成の試み」

発表者：木場隆司Dr

協力者：塚崎稔院長・岩田信之副院長・松本喜代隆副院長・伊東奈津子Ns・北4病棟スタッフ

「人格障害・疾病利得の病態観察及び介入の試み」

発表者：浅井文恵Ns

協力者：岩田信之副院長・杉町あかねNs・平野ますみNs・山崎由美Ns

「社会復帰できますか」～歩み始めた退院への道～

発表者：松本加奈Ns

協力者：内野忠彦Ns・原田修治Ns・森邊洋子Ns

「内観療法の自我強度の変化について」

発表者：常井幸夫Ns

協力者：長尾博CP

「老年期病棟における食事提供の現状」

発表者：福畑光恵Diet

協力者：梅田富美子Diet





三和中央病院

医療法人 清潮会 三和中央病院 広報誌

2010年12月発行

No.6

POCO a POCO

(ポコ・ア・ポコ)

発行人：塚崎 稔

発行所：長崎県長崎市布巻町165-1

TEL 095-898-7511・FAX 095-898-7588

<http://www.sanwa.or.jp>

印刷：昭英印刷株式会社 長崎市平野町13-13 TEL 095-844-0231

POCO a POCO (ポコ・ア・ポコ) とは…

ポコ・ア・ポコとは少しずつという意味があり、何事も少しずつ、徐々に良くなっていければなどの思いを込めてみました。

基本理念 安心できる、こころ温まる医療

- 基本方針**
1. 私たちは誠実で親切な心をもって医療に従事します
 2. 私たちは人権を尊重した良質な医療を提供します
 3. 私たちは地域精神医療と地域ケアを実践していきます



第63回九州精神神経学会・第56回九州精神保健学会

<目次> CONTENTS

P2・・・ Column①「脳と心」岩田副院長・九州精神神経学会・九州精神保健学会参加

P3・・・ Column②「キャンプの夜に」松本副院長・部署紹介(西2)

P4・・・ 交通安全講習会・秋祭り・防火・防災訓練

9月3日、17日 交通安全講習会



9月3日と17日の両日、大浦警察署の岩永様、松倉様により当病院職員へ交通安全に関する講習がありました。

飲酒運転はもちろん、携帯電話を使用しながらの運転が如何に危険かという事が改めて理解できました。普段は私達も通勤や仕事などで車の運転する機会が多いので十分に注意して慎重な運転を心掛けたいと思います。

特にこの時期は飲酒する機会が多くなる季節なのでより一層注意が必要です。



10月23日 秋まつり



11月19日 防火・防災訓練

地震が発生し病棟内で火災が発生したとの想定で防火・防災訓練を行いました。



医療法人 清潮会 三和中央病院
 診療科目：精神科・心療内科・内科・歯科
 〒851-0494 長崎県長崎市布巻町165-1
 TEL 095-898-7511・FAX 095-898-7588
 E-mail：info@sanwa.or.jp